

地名からみた現代社会における古代の影響に基づく
地域社会評価の手法 - 千年村研究その2 -

地域評価
利根川

古代地名の現在地比定
河川流域

地域開発

正会員 ○庄子 幸佑¹
同 中谷 礼仁²
同 堀井 隆秀³
同 小林 千尋³

1 はじめに

本報告は、「平安期文献『和名類聚抄』記載地名の現在比定地を用いた〈千年村〉抽出方法に関する研究」に続くものである。

前報告において紹介した古代文献に記載された郷名の既往研究における比定地を、現代社会における古代の影響という観点から捉え直すことで地域社会評価の手法へと展開した。

2 〈古代地名の現在地比定〉の批判と定義の設定

2-1 〈古代地名の現在地比定〉方法の分析

〈古代地名の現在地比定〉を初めて全国で網羅的行なったのは吉田東伍と邨岡良弼である。まず彼らの手法分析を行い、さらに約百年後に出版された『角川日本地名大辞典』における〈古代地名の現在地比定〉の分析を行った。□吉田東伍『大日本地名辞書』

明治33～40年にかけて富山房から刊行された。その中で吉田は言語学的に地名の音韻の変化について分析を行った。その上で、全国の地名の位置や来歴などに関して、旧国名－新郡名－市区町村名・自然地名の階層にて、古文書・口碑・伝説などを精査し、論じている。現地調査はほとんど実施されず、考証史学的手法を採っていた。¹ 古代地名として『和名類聚抄』記載の郷名を市区町村名の階層に掲出し、現在地比定を行っている。その方法的特質として、古代地名と大字・村名・浦名など「地名の類似性」を比定の論拠としていたことが指摘される。² □邨岡良弼『日本地理志料』

明治35～36年にかけて東陽堂から刊行された。『大日本地名辞書』が出版当時の地名を起点としているのに対して、『日本地理志料』は「『和名類聚抄』の地名に対して、）箋釈を加えた」³形式である。方法的特質としては、吉田と同様に「古碑鐘銘、社寺の文書、符牒等に至るまで実に詳密精確を極めている。其巻末に列挙されてある参考書は約四千あまりあるが、その大半は地方の社寺等のみ伝わるような写本である」⁴とされ、文献や文字資料の分析を中心とした考証史学的方法を採っている。現東京都にあたる武蔵国郷の記述内容を精読したところ、⁵類似する地名を論拠として現在地への比定が行われていたことが判明した。⁶

□『角川日本地名大辞典』

『角川』は、1978-90年にかけて刊行され、それまで行なわれた〈古代地名の現在地比定〉を総括している。

2-2 比定行為の批判と定義の設定

そこで、『角川』の記述内容を分析したところ、吉田や邨岡の手法である地名の類似・表記の一致以外にも、い

表1. 現在地比定論拠の整理

音韻・表記との関係性		古代国家機関との関係性				古代集落存在の痕跡との関係性			
地名 (大字) の 類似性	地域地名との 関係性 (河川・地 形名、神社 名、小字な ど)	文字表記 の一致	『延喜式神 名帳』記 載の式内 社 (ある いは封戸 集落) の 存在	古代駅(あ るいは駅 戸集落) との関連	郡衙ある いは国衙 との関連	ほか古代 国家機関 との関連	古代集落 遺跡の発 掘成果	古墳・遺 跡・横穴 などの存 在	古代条里 跡の存在

くつかの現在地比定における論拠を見ることができた(表1)。大別すると、【地名の音韻の類似・表記の一致】【古代国家機関との関係性】【古代集落存在の痕跡との関係性】である。これらは比定論拠としての確実性は異なる。しかし、古代が現在の比定地に潜在する可能性として、等価に検討しようと考えた。そこで、〈古代地名の現在地比定〉を以下のように定義したい。

〈古代地名の現在地比定〉とは、

現地域と古代地域とを空間的に結びつける行為である

古代に郷名が存在し、それが国家に認識されていたということは、そこに社会集団が存在した事実と同義である。〈古代地名の現在地比定〉という行為は地名の類似性や古代国家により認識されていた神社や郡衙、駅あるいは古代集落存在の痕跡の存在を通して、社会集団が存在したであろう地域を現在の日本の中に見出す行為と言えるのである。

3 現代日本社会における古代存在の指標化

3-1 古代社会と空間的に結び付けられた現在地の抽出

さて比定行為を上述の定義の中で捉えると、〈古代地名の現在地比定〉の比定精度の類型は、現代社会における古代の影響度を意味すると考えた。

ここで、一度、「古代地名の現在地比定とは、現代社会と古代社会とを空間的に結びつける行為

である」という視点のもと、大字領域に比定される現在地について、その特性を考えたい。比定行為では、地名や古代に関する事物をもとに現在と古代の空間的な引き合わせが行われる。つまりここで比定された現在地というのは、ほかの地域より古代に関連する事物を多く見ることのできる地域ということができる。特に大字の領域で比定される現在地は、その空間における古代社会の顕在度が高いと考えることができる。そこで本研究では、現代社会と古代社会とを空間的に結びつける上での相対的な指標を〈古

比 定 可	①単一の大字に比定
	②複数の大字に比定
比 定 不 可	③市域に比定
	④河川流域など③より広域な範囲に比定
比 定 不 可	⑤比定に関する説が異なる
	⑥比定地は未詳とされる
	⑦比定に関する記述がない

図1. 比定精度による比定地の類型

代社会顕在指数⁷と名付け、以下の分析を行った。

3-2 古代と空間的に結び付けられた現在地の傾向分析

全国の、古代地名が比定される現在地の類型化を地図上に展開した。空間的限定性から、現在の大字領域に比定される地名の割合によって、色分けを行った。古代郡を単位とし、図中には（大字領域に比定される地域）／（古代郡の郷数）を示した。⁸ここでは、古代の郡を母体とした。古代郡は、国の下位単位として数個から十数個の郷を含み、在地の共同体と強く結びついた行政区画であるとされるものである。⁹〈古代社会顕在指数〉の高い地域とは、現在の大字領域に比定される地名が相対的に多く密集する地域である。

〈古代社会顕在指数〉の高い地域群

- ・古代の畿内にあたる地域とその外縁部
- ・中央構造線およびフォッサ・マグナ上の地域
- ・瀬戸内海を囲む地域

〈古代社会顕在指数〉の低い地域群

- ・中部地方のうち、愛知－岐阜－福井－石川付近
- ・東北地方のうち、福島－新潟付近
- ・九州地方全体

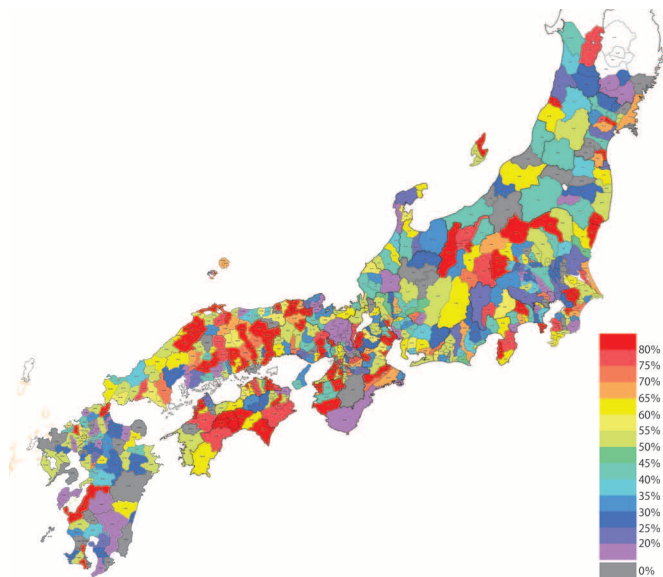


図2. 古代郡を母体とした〈古代社会顕在指数〉による全国色分け図

これら抽出された全体的傾向の個別分析は今後の大きな課題であるが、次節において2012－3年度に実地調査を行った利根川流域にしばり、その傾向を詳細に検討した。

4 まとめ—地名からみた現代社会における古代の影響に基づく地域社会評価手法

4-1 利根川流域における〈古代社会顕在指数〉の性質

図3には、利根川流域における〈古代社会顕在指数〉に利根川本流（黒線）・流域（白太線）・支流（白細線）を重ねている。¹⁰これを見ると、利根川流域の上流部、およびその支流に〈古代社会顕在指数〉の高い地域群が存在する。この地域は、関東平野が山間部と接する地形・地質的特質をもつ。対照的に、中流部から下流部にかけては〈古

代社会顕在指数〉の低い地域群が続く。利根川中流・下流は近世以降、大きな開発が幾度となく実施されており、その開発事業によって、それまで存在していた地域構造が改変し、現在では古代の存在が希薄になっていると考えられる。¹¹一方で〈古代社会顕在指数〉の高い地域群は、現在まで大規模な開発から取り残された地域であることも推測できる。これを肯定的に捉えると、古代から徴税が行われ続けてきたにもかかわらず、持続可能な生活と生産を見込むことのできる地域でもあると考察した。

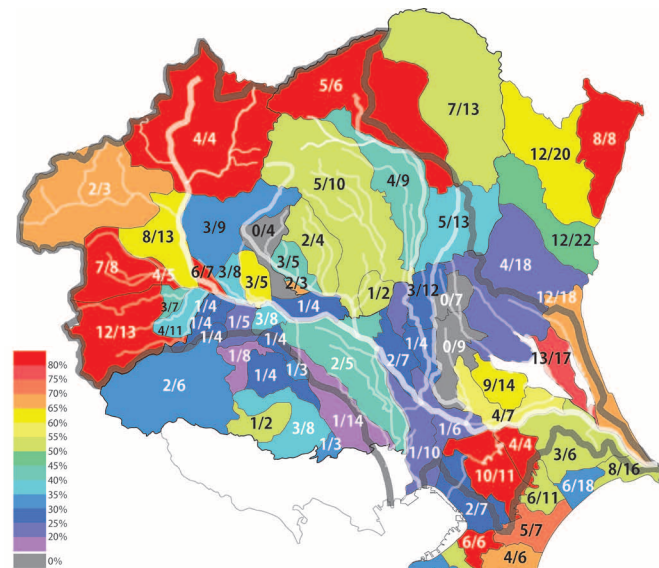


図3. 古代郡を母体とした〈古代社会顕在指数〉による利根川流域色分け図

4-2 地域社会評価手法として

本稿では〈古代地名の現在地比定〉を現代社会における古代の影響と捉え直すことで、歴史的な事物が現代社会の中にどれほど現存しているのかを相対的に明示する指標を紹介した。これは現在の地域社会の固有性や歴史的残存性を評価する手法となりうるとも考える。

次稿では、これまでの手法により抽出した地域から千葉県を対象に実施した実地調査について報告する。

図版出典 すべて筆者作成。

註1 川合一郎「吉田東伍の歴史地理学とその後継者」（『歴史地理学』no.47, p28, 2005）
2 小林千尋「吉田東伍の歴史地理学的方法的特質」（早稲田大学中谷礼仁研究室蔵、2013）
では、志摩国13地名を分析の対象としている。3.4 p73, 澤田總清「頼岡良弼先生の事ども」（『國學院雑誌』第四十六巻・第十二号、1930）、旧字体は訂正した。この中で吉田は、頼岡のところに出入りしており、その際に資料を閲覧させてもらったという記述がある。なお『大日本地名辞書』には、『日本地理志料』を引用している箇所が多く見受けられる。5 武蔵国郷を対象としたが、その中でも『角川』において古代地名が大字の領域に異論なく比定されているものを対象とした。6 地名の類似を現在地比定の論拠とする点について検証しておく。上総国（現千葉県）と越中国（現富山県）の古代郷名の歴史的変遷を追う、それと現在地比定を比較分析したところ、A. 古代から近世にかけて類似・一致の地名が確認できる／B. 古代と近世に類似・一致の地名を確認できる／C. 古代以降、類似・一致の地名は確認できないが、地域口承などにより古代からの連続性を確認できる／D. 古代以降、類似・一致の地名は確認できないが、その古代地名に関連する事物の存在により現在地を比定する、に分類できた。つまり、地名を比定論拠としても地名の存続には異なるパターンがある。しかし本研究では古代社会と現代の社会の関連性を問題としているため、これらのパターンは加味しないこととした。7 簡略化すると、ある地域における〈古代社会見在指数〉＝（ある地域の大字領域に比定される古代地名）／（ある地域における古代地名）⁸ 同じ割合であっても絶対数は異なるが、ある圏域を相対的に評価するために、この手法をとっている。図に示した分数表記の文字色は、背景色との混同を避けるために付けている。9 永原慶二監修『岩波日本史大辞典』1999。古代郡の領域は、『日本古代史地名辞典』（雄山閣、2007）に記載される図版を参照した。10 国土交通省関東地方整備局利根川ダム統合管理事務所ウェブサイトで公開される「利根川流域図」を参照。11 例えば、江戸前期に行われた「利根川東遷事業」では、①治水、②新田開発、③流道路の確保、④軍事目的としての外堀化が行われた。ちなみにこれが現在の利根川水系の基礎となっている。
※本報告は、庄子幸祐「地名からみた現代日本に於ける古代社会の影響に関する研究—古代地名の現在地比定の分析をもとに」（2013年度早稲田大学建築史研究室修士論文）に基づくものである。

1 香川県総務部営繕課 技師

2 早稲田大学創造理工学部建築学科 教授・博士（工学）

3 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 修士課程

1 Engineer, Building and Repairs division, Kagawa Prefecture.

2 Prof, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ., Dr Eng

3 Graduate student, School of Science and Engineering, Waseda Univ.